

George Eliot : Victorian Women and Her Heroines (3)

(1991年3月31日受理)

石田 美栄
Mie Ishida

Key Words : 19世紀, 英国小説, 女性

I

ジョージ・エリオットは最後の大作 *Daniel Deronda* (1876) において、いったいどんな女性を描いたのだろうか。女性が自ら自我を確立してゆく伝統のまだない中、お仕着せの女性像に反発して、自己実現への道をさぐるとすれば、女性的美徳は忍耐と従順という長い伝統の中で、19世紀英国社会が少しずつ変わりつつあったといえども、まだ「慎しみと服従が女の義務¹⁾」とされた時代では、ヒロインはいずれも悪女のイメージを逃れない。そうした中でも、エリオットはこの最後の作品では、思いきって倫理的、道徳的といわれる面をかなぐり捨てて、「異例の新しい女」, 「悪女のイメージ濃い女性像²⁾」の Gwendolen を登場させている。Robert Liddell は “The main characteristic of Gwendolen (which she shares with Rosamond) is a ruthless selfishness.³⁾” と Gwendolen を評している。そして、それがまたエリオットのエリオットたるゆえんであろうが、副線に Daniel Deronda という人物をもってきて、道徳的信念を盛り込もうとしているが、余りに理想主義的すぎて、自分の人生を切り開こうとする Gwendolen との接点において、どうも馴染まない。そのため果敢に題名も *Daniel Deronda* としているが、これはやはり、“Was she beautiful or not beautiful?” で始るごとく、Gwendolen Harleth の物語である。

しかしもっと現実的に、当時の女性がおかれていた状況を熟知したうえで、考察してみるならば、Gwendolen が「二度も道徳的選択を誤っている。⁴⁾」ということと、「新しいタイプの女性の創造」、そしてさらに「デロンダ・プロット」との関連を、作者エリオットの創作姿勢としてよりよく説明することができる。

三人のヒロイン、*The Mill on the Floss* の Maggie, *Middlemarch* の Dorothea そして Gwendolen は性格的にはよく似ている。強い意志を持ち、自我が強く、まわりの普通の女性とは異なり、当時としてはなにをしでかすかわからない、人々をはらはらさせる女性たちである。Maggie は自我の放棄すなわち死で終るのにたいして、Dorothea は夫の仕事を助けることによって自己実現が図れるものと思って結婚するが、この結婚は失敗と判る。夫の死によってこの失敗からは救われるものの、結婚が女性の自然な宿命だと考えられていた時代であった。従って、財産のための結婚も多かった時代に、敢えて財産を捨て、さらには性への言及がタブーであった時代に、官能的・肉体的なものを感じさせる幸せな結婚で終らせている。“The mid-Victorian heroine is a very passive creature.⁵⁾” といわれる中で、Merryn Williams は *Women in the English Novel 1800-1900* におけるエリオット評で “In her last two novels George Eliot took a very wide survey of the possibilities open to women in the late and early nineteenth century.⁶⁾” と述べている。エリオットの最後の二作品のうち *Middlemarch* については、George Eliot(2)で

Dorotheaを中心に女性たちをみたわけだが、ここではもう一つの *Daniel Deronda* に描かれた女性たちの中にどんな「可能性」が開かれているのか、そして Gwendolen の結婚について分析してゆきたい。Gwendolen は何故、Grandcourt と結婚したのか、そして Gwendolen もまた夫の死によって結婚の失敗から逃れることができるが、その後在り来りの方向に行くのではなく、“... — that I may live to be one of the best of women, who make others glad that they were born.” とはいったい何を意味しているのか。彼女の激しい気性と合わせて考察してみたい。

II

Daniel Deronda では題名のごとく、Deronda を取り巻くユダヤ物語に小説の半分が割かれていて、Dwendolen という女性の生き方と同等に話しの中心を成している。若い頃にはユダヤ人に強い反感を抱いていたエリオットが、このような作品を書いたのは、「西洋には何の根拠もないのにユダヤ民族を忌まわしく唾棄すべき民とする反ユダヤ感情が根強くあるが、彼らの受難と悲しみの長い歴史は西洋人の偏見と無知によることを、エリオットはドイチュエとの交友によって自ら悟ったに違いない。⁷⁾」エリオットの創作過程での、ユダヤ人への理解、再認識の意義はあるだろうが、シオニズムそのものに深入りしているわけではなく、Deronda の祖父からの重要な文庫の中身については、なにも語られていない。従って、ここでは、Gwendolen の良心、すべて時流に流されてしまわないための支えとして、神の声としての副線としてとらえたい。結婚の目的は違っていても、また夫の死に方は違っていても、結果的には、遺産のことや、心引かれる男性のいることなど、Dorothea と Gwendolen は似通った状況に追い込まれる。Dorothea は Ladislav からの強い求愛もあって結婚してしまうが、Gwendolen の場合は、女としてこれ程美しく魅力的な彼女の烈しい情熱を振り切るだけの男性にするには、Deronda ほどの宿命を背負わせる必要があったのかもしれない。さて、Deronda プロットについてはこれくらいにして、Gwendolen についてみてゆきたい。

第一巻は “The Spoiled Child” 「わがまま娘」と題され、Gwendolen がギャンブルをやっている場面での印象 “Was she beautiful or not beautiful? and what was the secret of form or expression which gave the dynamic quality to her glance? Was she the good or the evil genius dominant in those beams? Probably the evil; ...”⁸⁾ で始る、悪女のイメージ濃いものである。さらに Gwendolen の考えていることをいくつか拾い出してみよう。

... she did not wish to lead the same sort of life as ordinary young ladies did; but what she was not clear upon was, how she should set about leading any other, and what were the particular acts which she would assert her freedom by doing. (p.37)

Girls' lives are so stupid: they never do what they like. (p.49)

そんな Gwendolen が、家が破産状態になって母親や 4 人の妹たちを養わなければならない状況におかれる。家族を養う義務はこの時代男の背に重くのしかかっていたが、彼女の家庭には父親はすでに亡く、兄弟もいないから、次に義務のかかるのは伯父で牧師の Gascoign のはずであるが、この伯父も同

じく破産状態なのである。そこで家族扶養の義務を負った Gwendolen はいくつかの方策を思案する。この時代中流階級の女性が経済的に自立できる道はまだほとんどなく、惨めな住み込みの家庭教師と作家、特に歌姫といった芸術家くらいであった。従って Gwendolen は歌手になることを考えてみるが、意志の力をもってしても、才能によってもとても及ばないと言われ、住み込みの家庭教師の口が進められる。この話が進められる中で、その時代を反映する女性への規範のようなことがつぎつぎに出てくるが、Gwendolen はそうしたことに反抗を示す。

Her heart denied that the trouble was easier because she was young. When was she to have any happiness, if it did not come while she was young? (pp.214-5)

もし家庭教師の道を選べば、“under the dull demand that she should be cheerful with three Miss Momperts, under the necessity of showing herself entirely submissive, and keeping her thoughts to herself.” (p.215) Gwendolen の性格を考える時、そんな貧しく屈從的な生活は、なんと難しいことか、しかし家族への義務感、とりわけ母親の不幸を考えるのである。

ここで Gwendolen は Grandcourt との魅力ある結婚（地位、贅沢、好きなことのできる権力）を、Glasher 夫人という愛人と4人の子供がいることを知って諦めていたが、この窮状の中で考え直し始める、すなわち “a set of possibilities in Gwendolen’s mind – a vision of what Grandcourt might do for her mother if she, Gwendolen, did – what she was not going to do.” (p.218-9) それでも Gwendolen は非常に悩み苦しむが、結論としては結婚に踏み切る。他人を傷つけるような罰を犯すことはできないが、私生児は社会的に不利なのであって、自分が Grandcourt と結婚しても事態は同じことで、むしろ自分の意思でよくしてあげることだって出来るという風に考え、そして自分の母親を安心させてやれる期待と楽な生活を考える。“... , which suddenly make all things easier, desirable things not so wrong, and people in general less disagreeable.” (p.224) 結局 Gwendolen は結婚という制度に身を投じて、美しいという女の武器で夫を支配することによって、私の主張と家族を経済的に救うという役割をも演じてみようとする。

Marriage is the only happy state for a woman, as I trust you will prove. (p.18, 母親の言葉)

... , I trust that you will find in marriage a new fountain of duty and affection. Marriage is the only true and satisfactory sphere of a woman, and if your marriage with Mr Grandcourt should be happily decided upon, you will have probably an increasing power, both of rank and wealth, which may be used for the benefit of others. (pp.104-5, 伯父の言葉)

こうしたことは確かに彼女の利己的な性格をよく表わしているが、また同時に時代状況を考える必要がある。先にも述べた家族を養う責任、ざりとて女性には職業への道は閉ざされていた。Glasher 夫人の問題も、ダブルスタンダードは当時受け入れられており、またお金のための結婚もめずらしいことではなかった。それよりも彼女の誤りは、Glasher 夫人との約束を破り、自分自身を裏切ったことであつた。

Whatever was accepted as consistent with being a lady she had no scruple about; but from the dim region of what was called disgraceful, wrong, guilty, she shrank with mingled pride and terror; and even apart from shame, her feeling would have made her place any deliberate injury of another in the region of guilt. (p.221)

そして最大の誤算は結婚すれば夫を支配し、解放されて自由 (... the imagined freedom she would create for herself in marriage: the deliverance from the dull insignificance of her girlhood ...) (p.230) が持てると思ったことであった。このような Gwendolen を相手とするだけに、Grandcourt という人物は、男性支配の論理として完璧なまでに描かれている。秘書の Lush の強い反対にもかかわらず Gwendolen との結婚の決意は変わらない。また長年関係してきた Glasher 夫人を裏切って、家族の面倒までみなければならない結婚を何故するのか。それだけ Gwendolen の美貌に引かれ、美しいものを我が物にしたいという男のエゴ・快樂である。

She had been brought to accept him in spite of everything-brought to kneel down like a horse under training for the arena, though she might have an objection to it all the while. On the whole, Grandcourt got more pleasure out of this notion than he could have done out of winning a girl of whom he was sure that she had a strong inclination for him personally. ... ; and he enjoyed thinking of her as his future wife, whose pride and spirit were suited to command every one but himself. ... He meant to be master of a woman who would have liked to master him, and who perhaps would have been capable of mastering another man. (p.237)

次に少し Glasher 夫人についてみてみたい。美貌と才気の彼女も、アイルランド人将校で粗暴な夫との結婚に苛立ち、若かった Grandcourt と駆け落ちしたのであった。離婚はほとんど不可能な時代であったから、隠れた身で暮すこと10年、4人の子供までもうけ、3年前に夫は死んでいるので、Grandcourt と結婚することもできるにもかかわらず、裏切られてしまう。男のエゴに思うように踏みにじられた女の、せめてもの最後の自我主張がああ Gwendolen へのダイヤモンドの渡し方である。

“If you will indulge me in this one folly, I will be very meek—I will never trouble you.” (p.261)

“... I have never broken my word to you—how many have you broken to me? When you gave me the diamonds to wear, you were not thinking of having another wife. And I now give them up—I don't reproach you—I only ask you to let me give them up in my own way.” ... “I will not bear to have it denied me.” (p.261-2)

その強い主張は Grandcourt を “The effect that clung and gnawed within Grandcourt was a sense of imperfect mastery.” (p.262) と思わせる程のものであった。

さて、自分の結婚が正しいものではないと知りつつも、経済的理由から結婚を選んでしまった Gwen-

dolen は、夫を支配して自分の思い通りにして、自分の罪を償うつもりであった。しかし妻を絶対的に支配して、絶対服従を要求する、14才も年上の地位も財産もある夫との勝負では、娘時代あれ程自尊心の強い、自我の強かった Gwendolen のなんと惨めな状態。征服されてしまい、侮蔑と屈辱感に耐え、自尊心を削ぎとられてしまい、悲鳴一つ上げることもできないのである。

... — the belief in her own power of domination—was utterly gone. ... , her husband had gained a mastery which she could no more resist than she could have resisted the benumbing effect from the touch of a torpedo. ... And she had found a will like that of a crab or a boa—constrictor which goes on pinching or crushing without alarm at thunder. (p.317)

She sat in her splendid attire, like a white image of helplessness, and he seemed to gratify himself with looking at her. She could not even make a passionate exclamation, or throw up her arms, as she would have done in her maiden days. The sense of his scorn kept her still. (p.337)

Gwendolen というヒロインの興味深いところ (エリオットの意図) は、決して挫けてしまわないことである。強い性格、自我の持ち主なのである。どんな状況におかれても、もくもくと強い自我をもたげて敢然と進む。あんなに征服されてしまったかと思えた後、「翌日、……前夜の悶着が引き起こした悪寒がするような衝撃から回復すると、グェンドリンは夫が軽蔑混じりに与えた許可を利用して、好きなだけデロンダに会うことに決めた。……」⁹⁾

しかし、女がどんなに自我の強い性格であっても、またどんなに意義のある人生を送りたいと願っても、自立した生き方ができない以上、ほんとうの意味での自我など持ちようがない。男の制圧の論理がこれ以上なく完全な形で Grandcourt の中に盛り込まれている。ついに耐え難く (離婚はできない時代だから) 「別居を主張しよう」というのが、彼女の最初に考えた大胆な決意だった。しかし母の許に戻った場合のことを考える。

What future lay before her as Mrs Grandcourt gone back to her mother, who would be made destitute again by the rupture of the marriage for which one chief excuse had been that it had brought that mother a maintenance? ... Her uncle would tell her to go back. Her mother would cry. (pp.453-454)

考えることは簡単だが、現実には実行不可能なことが判る。そこで “If I am to have misery anyhow, I had better have the misery that I can keep myself.” (p.454) と考えるようになり、そしてさらに “Moreover, her capabilities of rectitude told her again and again that she had no right to complain of her contract, or to withdraw from it.” (p.454) と考える。

これはなんという Gwendolen の成長ぶりであろうか。試練の結婚生活の中で、「わがまま娘」から考える人間、他人を思いやる人間へと変ってゆく。惨めな状況、孤独の中で益々 Deronda を心の拠り所にするようになり、生きてゆくための唯一の光明ともなる。

逃げ出すことはとうていできない、自分さえ我慢すればと考えたのだが、その我慢さえも、夫との関

係だけではすまない、もっと耐え難いことが起ってくる。それは Glasher 夫人が息子を伴って、毎日乗馬の時間には生け垣の向こう側に現われるようになるのである。どうにもならなく追いつめられた時、Gwendolen は「死」について考え始める。自分の死そして夫の死について。それだけが逃げ道のように思えてくる。そんな中でも唯一 Deronda への思いが、自分の本当の姿を見てもらえる人、自分自身の良心、ほとんど神様のような存在として、なんとか生きる支えになっている。そして一方夫との関係は “Had Grandcourt the least conception of what was going on in the heart of this wife? He conceived that she did not love him: but was that necessary? She was under his power, ... (p.504)。しかし、実は、なによりも大切である、Gwendolen の魂の真髓の部分でどうすることもできない、支配できないのであるから、そんなことが Grandcourt にとっては許せるはずがない。そこで、彼女の結婚の目的であったはずの財産・お金について、ぎりぎり最低の体裁だけは保てるように遺産についての遺書を作って、脅しをかける。しかし、それでどうなるというものではない。魂の問題であり、Gwendolen はもはや色々と考え、善悪を見分けようとする人間に成長していた。とうとう Grandcourt はヨットの旅という二人だけの世界に誘い出して、彼女を閉じ込めてしまう。その間の両者の心理描写は、それがくり広げる緊張感は、まるでサスペンスドラマを追っているようである。

そんな Grandcourt の意図した旅にもかかわらず、運命のいたずらか、たまたま生みの母親に初めて会うために来ていた Deronda とジェノアのホテルで出会ってしまう。すると今度は、二人だけで出かけるのに手ごろなボートを手に入れ、Gwendolen が嫌がれば監禁しようとする。この場面で Gwendolen はなんとか支配されてしまうまいと、我の強さを示して抵抗する。

... ; but if he must tyrannise over her, he should not do it precisely in the way he would choose. (p.511)

“Let us go, then,” said Gwendolen, impetuously. “Perhaps we shall be drowned.” (p.511)

“It is all false!” said Gwendolen, bitterly. “You don’t in the least imagine what is in my mind. I have seen enough of the disgrace that comes in that way. And you had better leave me at liberty to speak with any one I like. It would be better for you.” (p.512)

それでもついにボートに乗せられてしまい、そして Grandcourt は突風で倒れてきた帆によって海へなぎ倒され、溺死することになる。確かに道徳的選択を誤って、助けを求めた夫を見棄てたという解釈もできるであろうが、Gwendolen の告白には、“死ねばいい、……死んで欲しい、どうすれば……” という我欲があっただけに、この劇的な場面での行動に彼女の内的な罪の意識とその贖罪の気持が加わるのである。私としては、Deronda の反応と合わせて、これを不可抗力であったと解釈したい。その上でこれを究極の意志と意志との死闘の中で、彼女も飲み込まれてしまうところから、やっとのことで逃れたのだと考えてみたい。Gwendolen が生き続けてゆくためには、そして新しい女性として新しい時代に向けて進んでゆくためには、相手を抹殺するしかなかったのである。そうした作者の意図を窺わせる^{くだ}件りを、事件告白そして Deronda の反応の中から拾ってみよう。

Sometimes I thought he would kill *me* if I resisted his will. (p.522)

“... —I did not want to die myself; I was afraid of our being drowned together. ... I should have prayed that he might sink out of my sight and leave me alone. I knew no way of killing him there, but I did, I did kill him in my thoughts. ...” (p.524)

The word “guilty” had held a possibility of interpretations worse than the fact; ... It seemed almost certain that her murderous thought had had no outward effect —that, quite apart from it, the death was inevitable. ... He held it likely that Gwendolen’s remorse aggravated her inward guilt, and that she gave the character of decisive action to what had been an inappreciably instantaneous glance of desire. (pp.524-5)

「人々が間違った結婚をしたということが、次第に認められるようになってきた、そして多くの小説家たちが19世紀の後半には、この問題に関心を持つようになった。」そして「多くの小説家たちがヒーローやヒロインに、その妻や夫を絶滅させることによって、悪い結婚から逃れさせている。ヴィクトリア女王時代の人々はたしかに、我々よりずっと死というものに慣れていたけれども、小説の中での便宜的な死の数がやはり不自然に多い。¹⁰⁾」と Merryn Williams が書いているように、ここでも夫の死によって Gwendolen を間違った結婚から逃れさせた。しかしここで注目したいのは、結婚の失敗と苦難の後の Gwendolen の人間としての成長ぶりである。自分自身のことそしてまわりの人々への理解、さらにはこれからの物事への判断を誤らないようにしようとする努力を窺い知ることができる。

“... Don’t be afraid of telling me what you think is right, because it seems hard. I have made up my mind to do it. I was afraid once of being poor; I could not bear to think of being under other people; and that was why I did something —why I married. I have borne worse things now. ...” (p.578)

“Perhaps you may not quite know that I really did think a good deal about my mother when I married. I *was* selfish, but I did love her, and feel about her poverty; and what comforted me most at first, when I was miserable, was her being better off because I had married. The thing that would be hardest to me now would be to see her in poverty again; and I have been thinking that if I took enough to provide for her, and no more —nothing for myself— ... (p.578)

“Yes —at least, I want to be good —not like what I have been,” said Gwendolen. “I will try to bear what you think I ought to bear. ... (p.578-9)

“I want to be kind to them all —they can be happier than I can. Is that the best I can do?” (p.580)

このような Gwendolen への Deronda の答えは、

“This sorrow, which has cut down to the root, has come to you while you are so young — try to think of it, not as a spoiling of your life, but as a preparation for it . . . ” . . . “ . . . You can, you will, be among the best of women, such as make others glad that they were born.” (p.580)

“the spiritual tie which had been continually strengthening” であり “He was the only creature who knew the real nature of Gwendolen’s trouble” である Deronda との別離が来た時、Gwendolen は完全に崩れてしまい、金切り声を挙げ、発作に襲われるが、そんな中で “But don’t be afraid. I am going to live.” “Don’t be afraid I shall live. I mean to live.” と繰り返す。

After all, she slept; and when she waked in the morning light she looked up fixedly at her mother and said tenderly, “Ah, poor mamma! You have been sitting up with me. Don’t be unhappy. I shall live. I shall be better.” (p.609)

この “I shall live. I shall be better.” とは、いったいどのように生きてゆくことなのであろうか。

III

この小説の中にはもう一人特に興味を引く女性がいる。それは Deronda の母 Halm-Eberstein 公爵夫人である。その時代の女性として、ユダヤの女として破格である。タイプとしては Gwendolen と大変よく似ているが、歌の才能があったからこそ、自分の意志で生きてゆくことができた。父親の束縛から逃れるために、自由を得るために結婚し、自分の才能を生した歌手生活をする事ができる。

“I did not want to marry. I was forced into marrying your father — forced, I mean, by my father’s wishes and commands; and besides, it was my best way of getting some freedom. I could rule my husband, but not my father. I had a right to be free. I had a right to seek my freedom from a bondage that I hated.” (pp.470-1)

娘を自分の道具としてしかみなかった父親は、彼女が結婚してから三週間後に死んだので、その後はやりたいようにすることができた。夫は仕事もやめて、ヨーロッパ最高の歌姫である彼女に献身、子供など欲しくないのに生れ、子供が2才の時夫が死ぬと、子供を嬉んで手放し、もうどんな絆も持つまいと決心したのだった。そして Deronda を手放した理由を、ユダヤ人という隷属から自由にしてやるためであったので、母親としての最も深い愛情からだったという。二度と結婚はせず、自由に芸術のために生きるつもりだったが、9年間の女王のような歌姫の生活の中で、声がおかしくなったと感じた時、ロシア貴族と結婚して、今では5人の子供がいる。もう死期が近いので、祖父からの手文庫を Deronda に手渡す手筈をしなければならぬので名乗りをあげたというのである。

実に身勝手な女性、自由奔放に生きた女性といえよう。その当時の規範から考えれば、またエリオッ

トの倫理観から判断すれば、大変な悪女、悪い母親、Deronda を苦しめた母親ということであろう。しかしこの夫人の言分を聞いていると、今日的な「女性学」で、女性の視点でという論理が窺える。すなわち作者エリオット自身がヴィクトリア朝時代の重苦しい規範、女であるが故の制約に苦しみ、作品のヒロインの生き方の中に、その時代の女性の苦悩やその中での新しい生き方を模索しているわけだが、この Halm-Eberstein 公爵夫人の言い分の中に、ある本音が吐露されていて実に興味深い。

“... I cared for the wide world, and all that I could represent in it. I hated living under the shadow of my father's strictness. ...” (p.473)

“... You are not a woman. You may try—but you can never imagine that it is to have a man's force of genius in you, and yet to suffer her slavery of being a girl. To have a pattern cut out — 'this is the Jewish woman; this is what you must be; this is what you are wanted for; a woman's heart must be of such a size and no larger, else it must be pressed small, like Chinese feet; her happiness is to be made as cakes are, by a fixed receipt.' ...” (p.474)

“... And when a woman's will is as strong as the man's who wants to govern her, half her strength must be concealment. I mean to have my will in the end, but I could only have it by seeming to obey. ...” (p.475)

まるでエリオットの本音の叫びを聞いているようである。Maggie はきっとこのように主張したかったであろう。このように自分の意志で自分の人生を切り開いていったとみえる Halm-Eberstein 公爵夫人であるが、結局運命のいたずらとはいえ妻・母の座に逃げ込んだことを後悔している。

“I repented. It was a resolve taken in desperation. That singing out of tune was only like a fit of illness; it went away. I repented; but it was too late. I could not go back. All things hindered me—all things.” (p.481)

自我の確立だの自己実現を求めろだのという試みからいえば、なんとあっぱれな生き方をした女性であろう。エリオットは、これをイギリス女性ではなく、「ユダヤの女」にさせている。当時のイギリス社会での女性の実情を考えれば、こんな描き方にならざるを得なかったのであろう、そして偉大な芸術家それも男では絶対に代れない女性の歌手であるからこそ、その時代では考えられないような生き方ができたのである。「ジョージ・エリオットは、自立して意義のある生き方をしたいと思っても、現実には結婚する以外に道がなかった女性たちを描いた。彼女たちは、夢を抱いた結婚生活の中にも自由を見出すことはできず、惨めな生活を送ることになった。不幸な生活の中で、彼女たちはなおも自由を求めた。」¹¹⁾従って「意義のある人生を送りたいという願いを持つ、目覚めた女性たちは、19世紀の閉ざされた状況の中で悩んだ」¹²⁾のである。

だれの目にも真に素敵なカップルと映る Deronda と Gwendolen。最後の出会いの場面では、精神的にも肉体的にも引かれ合う二人の一大ラブシーンとなるべき絡み合いが、エリオット風に、19世紀小説

らしく、ぎりぎりのところで清く美しく描かれる。けっして一線を越えて描かれることはない。Maggie と Stephen そして Dorothea と Ladislaw の間にも似たような緊迫した場がみられる。Maggie は消えてゆき、Dorothea は再婚するが、Gwendolen は結ばれない。この場面では両者共に涙を流し、互に相手の涙を同じハンケチで拭いてやる。そしてさらに次のように別れるのである。

... The burden of that difficult rectitude towards him was a weight her frame tottered under. She bent forward to kiss his cheek, and he kissed her. Then they look at each other for an instant with clasped hands, and he turned away. (p.609)

こんなに愛し合いながら、しかも寡婦となった Gwendolen との結婚には障害はないわけだが、結婚して結末とはならない。Gwendolen の良心ともいえる Deronda は “Is it absolutely necessary that Mrs Grandcourt should marry again?” と言う。確かに読者からみてもこの二人が結婚して幸せになるという風には考えられない。Deronda には真に生きる道、意義のある人生が明確になってきている。Gwendolen も “自立して意義のある生き方” を求めて行くことが伺える。Deronda との別れの最後の言葉にそれを見ることが出来る。

“You have been very good to me. I have deserved nothing. I will try—try to live. ... Don't let me be harm to you. It shall be the better for me — (p.609)

「私にとってはその方がいい……」と言いよんで、それとは何か言わないままで終わっている。すなわち、自分一人で生き方を探し、自分で生きてゆくということであろう。その後母親に向って、 “... But don't be afraid. I am going to live.” “Don't be afraid. I shall live. I mean to live.” (p.609) と繰り返す、次の朝目覚めた時、そばにいた母親をしっかりと見て、やさしく言う、 “Ah, poor mamma! You have been sitting up with me. Don't be unhappy. I shall live. I shall be better.” と。この最後の言葉、「もっといい人間になるの」とはどういう意味なのか。さらに Deronda への手紙の中で “... I have remembered your words—I may live to be one of the best of women, who make others glad that they were born. I do not yet see how that can be, ...” と書いて小説は終わっている。

「1800年から1900年の間には小説家たちの女性像にはっきりと変化があり、1890年までには自己犠牲よりも自己実現が強調されるようになった¹³⁾」という。また本邦初公開の訳本の解説が「*Middlemarch* が英国小説伝統の頂点に立つものとすれば *Daniel Deronda* は伝統を乗り越え、新しい人物の生きる新しい時代に向けて歩み始めた作者の姿勢が印象深い力作である。¹⁴⁾」と結ばれている。エリオット最後の1876年のこの作品で、Gwendolen は、自我の強い女性として、変わりつつある社会の中で、より自由を求めて自立する道を探り、自己実現への道を求めて人生の再出発するのである。

現代イギリス文学界を代表する小説家マーガレット・ドラブルは昨年来日の時に、次のように述べている。¹⁵⁾

文学は社会を映す鏡だと思ふ。虚構だが時代の顔、実相を映しだす。¹⁶⁾

小説を書くということは、現在私どもが生きている人生とはちがう人生、より良い人生を未来に想像する努力である¹⁷⁾と思います。

Notes

- 1) 竹之内明子訳、『ダニエル・デロンダ』（日本教育センター，1987），I，p.285.
- 2) *Ibid.*
- 3) Robert Liddell, *The Novels of George Eliot* (Duckworth, 1977) , p.176.
- 4) 「第一はグラシャー夫人を裏切り，グランドコート¹⁷⁾の求婚を受けた時，第二は，溺れて助けを求める夫を見棄てた時，彼女は我欲に負け，罪に堕ちてしまう。」（竹之内明子訳『ダニエル・デロンダ』，I，p.286. 富田成子の解説）
- 5) Merryn Williams, *Women in the English Novel 1800-1900* (London: Macmillan Press, 1985) , p.36.
- 6) *Ibid.*, p.146.
- 7) 竹之内明子訳，『ダニエル・デロンダ』，IV，p.284. 富田成子〈解説〉「『ダニエル・デロンダ』のユダヤ的要素」より。
- 8) George Eliot, *Daniel Deronda* (Everyman's Library, 1973) , p.1. 以後同書からの引用はページ数を本文に記す。
- 9) *op cit.*, III, p.70.
- 10) *op cit.*, p.30.
- 11) 倉持晴美，『19世紀小説一女性と結婚』（荒竹出版，1986），p.226.
- 12) *Ibid.*, p.227.
- 13) Merryn Williams, *op cit.*, p.43.
- 14) *op cit.*, p.288.
- 15) 川本静子の「ドラブル文学のプロフィール」によると「ドラブルの特徴はジェイン・オースティンやジョージ・エリオットなどによる倫理的風俗小説（Novel of Manners）との親近性である。彼女はこうした先輩作家たちと同じく，ヒロインの「生」を日常的人間関係の場で一貫して追求してきた。』【対談，キャリアと家族—マーガレット・ドラブル／津島佑子】（岩波ブックレットNo.163, 1990），pp.3-4.
- 16) 「英国作家マーガレット・ドラブル氏に聞く」，『朝日新聞』1990，4月3日.
- 17) *op cit.*, p.3-4.